研究叢書 一二六

今鏡の周辺

山内益次郎 著

和泉書院

山内益次郎（やまうち・ますじろう）

大正7年8月　長崎県生れ
昭和32年早稲田大学大学院修士課程修了
前皇學館大學教授
著書　『壱岐名勝図誌』翻刻解説（名著出版）
『今鏡の研究』（桜楓社）
神宮古典籍影印叢刊『西公談抄』
『発心集』解説（八木書店）

研究叢書 126

今鏡の周辺

一九九三年二月十五日初版第一刷発行
（検印省略）

著者　山内益次郎
発行者　廣橋研三
印刷所　台北清水印刷
製本所　小幡製本所
発行所　有限会社　和泉書院
〒五四三
大阪市天王寺区上汐五―三―八
電話　〇六―七七一―一四六七
振替　大阪　七―一五〇四三

ISBN4-87088-572-7　C3395

目次

第一章　帝紀の周辺……一
崇徳院慰霊……二
「末の世の賢王」二条天皇……三九
幼帝六条天皇（付）月読神社と伊岐氏……六三
「六条院宣旨私考」について……七八
第二章　后妃伝の周辺……八九
「諸大夫女」美福門院……九〇
二代の后多子皇后……一三六
八条院暲子内親王……一四〇
第三章　列伝の周辺……一六三
「蜂飼大臣」藤原宗輔……一六四

妙音院相国藤原師長……一八二
「宰相老」源師頼……二〇七
「鞠足の公卿」藤原成通……二二五
第四章　素材・本文……二五五
信西の天文道……二五六
「西公談抄」における西行の歌談……二七三
地下楽人の登場……二九四
隠逸詩人嵇康と今鏡……三一六
中世初期の今鏡本文……三三三
あとがき……三五一

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第一章　帝紀の周辺

崇徳院慰霊

『今鏡』作者は崇徳朝の廷臣で、天皇退位約一年後にあたかも帝に殉じたかの如く出家した。おそらく帝に対する敬愛の情は他の帝の場合よりも深かったにちがいない。崇徳院は退位後不如意失意の事が多く、遂に保元の乱に敗れ、讃岐遷幸の悲劇の中『今鏡』擱筆の数年前に配所で崩御された。作者の帝に対する悲傷の情は痛切であったろうと思われるが、記述は情を抑え、その崩御の様を源氏物語の援用等によりむしろ淡々と述べ、白峰の聖の生れ替りであったという夢告に託して、因果輪廻の仏説に拠って帝の生涯を説いている。崇徳帝の場合、その数奇な生誕や和歌に対する情熱、悲劇的生涯等生前の話題が多々あるが、崩後の怨霊慰霊の話題も多く、史書・物語説話・民間伝承等に多く採りあげられている。しかし『今鏡』の著作はそれらの怨霊談・慰霊の挙が行われる以前であって、崇徳紀の後半部あるいは完結部が書き足りなかったのは、作者にとって心残りであったろうと思われる。

史書・日記類の崇徳天皇の記事は概ね保元の乱までで、讃岐遷幸後の事蹟は軍記物語や説話等によって後世に伝えられ、配流地の地方史・伝説・口伝も豊富であるが、これらは多分に伝承的なものが多く、史実とは言えないものが含まれているが、文飾誇張はあるにせよ、崇徳院の人物像の側面と、人々の院に寄せる同情畏敬、人々の思い描いた霊魂の姿等をうかがうことができる。

崇徳院の配流と怨霊談については、すでに水原一氏の詳しい論説（「崇徳院説話の考察」『平家物語の形成』一七七ページ

ジ以後）があるが、此処では崇徳院の配流中の心事、周囲の人々の悲傷や慰霊について、詩歌物語等の側面からも述べてみたい。

一

『今鏡』は新院の讃岐遷幸について、「やゑのしほぢをかきわけて、はるゞとおはしましけむ、いとかなしく……いかばかりの御こゝちせさせ給けむ」と述べ、その章を「やゑのしほぢ」と名付けいるが（第二の「すべらぎの中」）、これは大江匡房の「限あればやへの潮路に漕出ぬと我思ふ人に争でつげまし」（『続後撰集』巻十九羈旅歌）、又は作者の父為忠の「はるばると見れば小島の浜べより浪立ち迷ふ八重の塩みち」（「為忠百首」）の句から採ったかと思われる。『保元物語』（金刀本）の「はるばるとやえのしほぢをかきわけ……」の文も偶然の一致ではなく、『今鏡』の影響と言うべきであろう。

保元元年七月二十四日の『百錬抄』の記事は「新院自二仁和寺寛遍法印坊一奉レ配二讃岐国一。去十二日御出家」とあるが、『兵範記』の二十三日には、もっと詳しく、蔵人資長が勅定により仁和寺に行き、院の乳母子保成の網代車に召され、女房同車、右衛門尉貞宗が院の後に従い、式部大夫重成が数十騎の武士を率いて囲繞し、鳥羽で乗船、讃岐国司が配所まで守護し、重成は帰参したと述べている。

この新院讃岐遷幸の記述は『保元物語』に詳しい。日時・人物は『兵範記』と一致するものが多く、蔵人資長・乳母子保成、式部大夫重成等の人物は表記も同じである。又女房が同車したこと（物語は三人）、鳥羽乗船の事は鎌倉本では鳥羽の草津とあり、讃岐国司は物語には季行等と実名が出ており、貞宗の名は半井本には定宗となっている。このように遷幸記述について『保元物語』は史実に即しているものと思われる。保元の乱の直後新院の心中には乱に敗れた身の行く末、不安、嘆きが交錯し、「思ひきや身をうき雲になしはてて……」「うき事のまどろむほどはわすられ

てさむれば夢のこゝちそすれ」等の歌を詠まれた。又一方では出家したのだから、都近くにの押し込められる程度であろうと楽観的な気持もあったが、讃岐配流という予想外の重刑であったので驚該悲傷の思いは大きかったという。院の讃岐遷幸については、今までの行幸、御幸と全く異って、虜囚として護送されるおぞましさや、見納めともなりそうな都の風物・鳥・鐘・月・時雨・嵐山との別れに心を傷められた事を述べていて、特に金刀本は詳しい。

式部大夫重成は清和源氏で、保元の乱では朝廷方であった。『兵範記』には「式部大夫重成、率二武士数十騎一囲繞、於二鳥羽辺一乗船。乗船後、一向讃岐国司沙汰、殊可レ奉二守護一由、被二仰下一了。重成帰参了」とあり、『保元物語』では、その間の事情を稍詳しく述べている。新院方の敗北後内裏では仁和寺の寛遍坊へ新院を遷し、重成に守護させた（『兵範記』では七月十三日以後）。七月二十三日讃岐に向い出発の際も重成が護送する事になった。新院は鳥羽を過ぎるに当って重成に御父鳥羽院の御墓に最後の暇を告げたいと申し出られたが、重成は「後勘おそろしく候」云々と言って許さなかった。新院は御墓のある安楽寿院の方に向って車の中で遥拝され、「御涙に咽ばせ」られた。重成は「無由御伴シテカヽル事ヲ見聞ハトテ、袖ヲゾ顔ニ押当テヽ」涙を流し、讃岐までのお供を固辞して院御乗船とともに引返した。院は重成に「此日来情有ツル事コソ難忘ケレ。思召忘ルマジキゾ」と別れを惜しまれた（半井本）。

又、院は鳥羽草津で光弘法師を召されたが去七月十一日に光弘はすでに捕えられて切られた事を御存じでなかったという（『兵範記』では七月三十日斬罪となっている）。光弘は桓武平氏家弘子で、保元の乱で父とともに春日表で「手痛く」防戦して内裏方を悩ませたが、戦いが不利となると新院を「肩に引懸けまいらせて」、阿波局・教長・少輔内侍・知足院・仁和寺と京中を馳せ廻った。その間光弘は院に殉じて出家をしたという（金刀本）。七月十三日院が仁和寺の寛遍坊に遷られた後も光弘は院に従っていたものと思われるが、やがて内裏方のため捕えられ、二十七日には罪名宣下を受けた（『兵範記』）。

『兵範記』には讃岐国司の官名だけで氏名が無いが、『保元物語』の半井本に季行とあり、『公卿補任』の藤原季行

の記事と合う（金刀本は秀行、活字本は季頼、『平家物語』延慶本は参行としている）。季行は藤原道綱五世の孫で、父は正四下敦兼、母は院近臣顕季女であった。阿波・武蔵等の守を経て讃岐で六か国の国守となり、新院讃岐遷幸後八か月で守を去った。その後太宰大式を経て従三位に叙せられたが三年後に薨去した。季行は鳥羽草津で新院一行を受け取り、護送の武士両三人と共に讃岐へ向った。金刀本等によると、屋形の外から釘を打ち付け、外部と遮断した為院は須磨の行平遺跡も淡路の大炊御門の跡も、御覧になる術がなく、ただその流浪漂白の思いを我身によそえて悲しまれたという。この道中の記は半井本は簡単で、金刀本や鎌倉本は文飾も多く描写が詳しい。

『保元物語』には又院の讃岐遷幸前後の「不思議の事」の記がある。七月二十三日新院の御出発の日に、京都では源義朝と平清盛の合戦の噂が広まった。源平の兵士等が東西に馳せ違い、庶民は逃げ惑い、公卿等も狼狽し、信西は帝に事の由を奏し、清盛と義朝に子細を問うと、両人は全く「跡形なき由」を申しあげた。物語はこれを「天魔の所為」（半井本は「天狗ノ所為」）と述べているが、この時はまだ新院の怨念とは結びつけていない。

「新院御謀反」と関連づけて『保元物語』は「御夢想の記」について記している。出納友員が同日新院の三条烏丸御所（活字本は「中御門東洞院の御所」）の文車の手箱に秘蔵されていたもので、夢の中に重祚の告があった都度記し止められたものであった。活字本は重祚や院政を「王者の法にもたがへり」と批判し、他書は新院が常に重祚の望みがあったため、夢に現れたのであろうと述べている。ついで活字本は保元の乱について論評し、その因を「不儀の御受禅」（近衛帝の即位）、「后妃に迷ひて弟をもちゐる、国のみだるゝもとひなり」と述べている。このような趣旨の文は他本では上巻の始め「新院御謀反思し召し立たるる事」に述べられている。

新院讃岐御到着八月十日は『保元物語』各本一致する。急な事で御所は未完成の為、当国二ノ在片高遠の松山の堂に入御された（『保元物語』金刀本、半井本、『平家物語』諸本及び『白峰寺縁起』[注①]何れも高遠[注②]であるが、『保元物語』活字本・鎌倉本には高季の松山の堂とある）。やがて建造中の院御所ができ、直島に遷られた。金刀本はその後院が島の居住を嘆か

れたので、「四度の道場辺鼓の岡」に御所を造ってお遷ししたと述べてうる。その後の遷御の記述は無いが、崩御の地は「讃岐国府」（半井本）、「志戸」（活字本）、「志度の道場と申山寺」（鎌倉本・平家延慶本）、「志度」（長門本）、「支度」（盛衰記）と分れている。

讃岐の松山郷は『和名抄』には阿野郡内九郷の一として記録されている。『白峰寺縁起』には「讃岐国松山津に御下着有」と記されているが、当時の松山津はまだ保元の頃とさして変っていなかったであろう。『万葉集』や『後拾遺集』定頼の歌、慈鎮和尚の『拾玉集』に詠われている「松が浦」について、『綾北問尋鈔』[注③]は松山津と同一箇所としている。縁起では松山の御堂御在住三年間と記しているが、他には期間を記した例はない。

この間の院の御動静を示すものに

松山へおはしまして後都なる人の許に遣はさせ給ひける

思ひやれ都はるかに沖つ浪立ち隔てたるこゝろぼそさを

（『風雅集』　巻九　旅歌）

の御製がある。『綾北問尋鈔』では、高遠が西庄の長命寺に院をお遷し申しあげたが、此処で院は「山たかみ……」及び「爰もまたあらぬ雲井と成にけり空行月の影にまかせて」の歌を詠まれたので、以後この寺を「雲井の御所」と呼ぶようになったという（この歌は縁起にも出ているが、雲井の御所云々の記は無い）。『摩尼珠院寺譜』[注④]は長命寺を末寺と記し、『讃岐国名勝図会』[注⑤]は寺を弘法大師の草創と言い、何れも雲井の歌を挙げている。長命寺跡は鈔には西庄とあり、図会は林田郷と記しているが、現在その地は確定できないという。

『平家物語』は院が直島御所に先ず入御、ついで松山となっているが、『保元物語』は逆に松山からかねて造営中であった直島御所へ遷御されたと述べている。『十訓抄』等説話集では、讃岐下向と記されるだけで細かな地名は見られない。直島の院御所について最も詳しいのは『保元物語』の金刀本・鎌倉本・『平家物語』の延慶本である。三書行文、内容共通点が多い。金刀本によると、島は陸地から舟行二時（四時間）の距離にあり、田畑住民は無い。院

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

御所は四分一（国司邸宅の広さ――公卿一町四方の四分の一）にも足らず（金刀本以外は方一町）、四方に築地があり、建物は一宇のみで門は一箇所、錠が厳重にかけられて人の出入は禁止され、院の仰せは警護の兵士から目代に言上するだけで、外部の人々との交渉は全く絶たれていたという。海上の眺望は開けていたが、院は松風・浦浪・千鳥の声を聞き、空を仰いで月に愁い、風に嘯く外無かったと述べられている。

直島遷幸についてもっとも詳細で他に所伝を見ない伝承を集めているのは『直島旧跡順覧図会』[注⑥]である。この中には百数十箇所に及ぶ地名、寺社名について記述があるが、その中三十数箇所崇徳院やその関係者に縁故のある地名がある。院が始めて御着岸された港は王積の浦で、院の行宮跡も近くにあり、崇徳天皇社が山上にあるという。院が訪ねられたところとしては、極楽寺・円明院・能見ヶ浦・王園の端・五反地か浦・波無の浦・朽名亀谷・屏風島・井島明神等があり、又御幸の際命名された地名に、直島・極楽寺・円明院・王園・局島・井島等があるという。

崇徳院ゆかりの人物としては、院寵妃三宅宮内大輔重成娘の京があり、その子に重丸（後に三宅重成孫として、三宅左京大夫重行と名乗った）があったという。京女は院の崩御後剃髪して法名を妙理と称し、千切（ちぎり）坊に住んで院菩提を弔った。かつて院が「沖中の小島の谷間清水くみ露の情にうさ忘れつつ」と詠まれた時京女は、「案山子より外には知らん人もなし山田の水に月やどるかも」と返歌を奉ったという。京に残って居られた院の皇女は、重成という臣と共に父院を慕って直島に渡られたが、その港が姫泊が浦で、山を姫泊山と言った。五反地が浦（琴弾浦）は皇女が院の為に琴を弾じ、和歌を詠じた所であるという。皇女は院崩後仏道に入り、この島で亡くなられ姫宮の森に葬られた。院の従者として森田三郎・野美一郎・義実（姓不明）等があったという。

この図会によると、院の直島における御生活はある程度自由が利き、御所を出て各地に御幸されたり、皇子・皇女・寵妃もこの島に在って無聊を慰められていたように思われる。軍記物語は怨霊談の効果を高めるためか、配所の御生活の苛烈さを強調して描こうとしたのに対し、地方的伝承は、類ない高貴な院がこのような辺地に在住された事に、

あるいは畏敬し、あるいは同情して貴種流離談を育てあげたのであろう。

『保元物語』金刀本は院を直島から鼓岡に遷し奉ったと述べている。ただし半井本・古活字本・鎌倉本等にはこの項が無く、『平家物語』増補系諸本では直島から松山、ついで鼓岡遷御と記している。金刀本には遷御の理由を、直島に居られた新院が「余に島の御栖居も御嘆有ければ、国司・官人はからひとして、四度の道場辺、鼓岡（京大図書館本――「讃岐国の府に鼓岡」に拠るべきであろう）と云所に御所をしつらひて渡し奉る」とある。此所の御生活も直島と大して変りは無く、京における近侍の人々を思い、虫の音も松風も懐旧の涙をそそる因となった―院は遠流の身を愁え、平城帝の故実と比較し、主上を始め当局者の処置を嘆かれる毎日であったという。この項は『保元物語』金刀本と平家延慶本とは、内容行文ともに共通点が多い。延慶本や盛衰記には、この間に院は関白にも善処を願われたが返事が無かったと述べている。

鼓岡については『白峰寺縁起』にも地名はあるが詳しい記事は無く、地方的伝承では『讃州府志』[注⑦]に「鼓岡木丸殿、一曰車返御所」とあり、『綾北問尋鈔』には此処に「六年住ませ玉ひ」と述べ、「命ありてかやか軒端の月もみししれぬは人のゆくすゑの空」の御詠を挙げる。又近くの内裏の泉は院の供御を清めた泉で、綾坂も院の遺跡と述べている。『摩尼珠院寺譜』には「綾府中鼓岡にうつし奉る」として、ここで『きり深く綾の川辺になく千鳥声にや友の行かたを知る』の御詠があったと述べている。

崇徳院が五部大乗経を書写された事は『保元物語』『平家物語』の諸本に記述があり、『白峰寺縁起』や地方的伝承中にも霊異談的な内容のものが見られる。藤原経房の日記『吉記』には院の皇子元性法印の許に院御自筆の五部大乗経が保存されているという記事があって、写経の事実を裏付けている。写経の時期についてはほとんど讃岐遷御後三年間、平治元年以前となっているが、『白峰寺縁起』では讃岐在住九年間としている。しかしこの場合平治元年に亡くなった信西が京都の寺社納経に反対した事と矛盾する。写経の場所は『保元物語』金刀本・『平家物語』延慶本

・盛衰記・長門本が鼓岡、『保元物語』半井本と活字本が直島、鎌倉本と『白峰寺縁起』は単に讃岐となっている。

写経の動機について、金刀本には、院は讃岐の配所で親しく語り合える廷臣もなく、常に懐古の情に沈まれていたこと、十善の帝位を履む果報がありながら、配流の憂目にあう前世の罪業を嘆かれたことが先ず書かれている。ついで、当帝（後白河帝）はかつて新院が養育された弟宮であるのに、往昔の平城天皇の重祚事件より苛酷な刑を科された事に対して、新院は「心憂く」思われたが、結局は今生に於ける帰京の望みを絶ち、「後生菩提の為に」御自筆で五部大乗経を書かれたと述べている。これは物語作者が院の心境を忖度したものであるが、院より御室への御書として掲げられた文にも「吾離二故宮一送二思於他郷之路一」に始まって「速翫二三菩之月一」とあり、趣旨に於ては通じるものがある。盛衰記にもこれを要約した同旨の院御書があり、最後は「必三仏菩提の妙位に昇らん」としめ括っている。半井本・活字本・『平家物語』長門本も写経は後生菩提の為となっている。鎌倉本と平家延慶本は怨みに報いる為であると述べているが、怨み云々は他本では院が納経依頼を拒否された後の血書の誓状の場合である。又金刀本・鎌倉本・平家延慶本は血書としているが、他本は墨書となっている。『吉記』では血書の記事があるが、これも部分的なもの（誓状等）で、全文血書は不可能であろう。

金刀本によると、新院は弟宮御室の覚性法親王へ書状並びに「浜千鳥あとは都へかよへども身は松山にねをのみぞなく」の御歌を添えて、この自筆五部大乗経を鳥羽か八幡社へ納経してもらいたいと依頼された（半井本、平家長門本、盛衰記も同様）。法親王は涙を流して関白（基実）に取り次がれた。関白も新院の御希望に副うよう取りなしたが、少納言入道信西は、配所に在る院の手跡が都へ還るのは不吉であり、又納経にどのような願望が籠められているか不安であるといって反対した（活字本と鎌倉本には信西云々の記事はない）。こうして朝議は納経拒否と決定された。

五部大乗経は華厳経・大集経・大品般若経・法華経・大般涅槃経合わせて一九〇巻で（『拾芥抄』）、隋の天台大師が大乗経の中より選んだものという。本来大乗経の粋を集めたものとして、後生菩提を祈ったものと思われるが、俗事、

現世利益を祈る事もあった。『太平記』には藤三位資通が五部大乗経を「一字三礼ニ書写供養シテ、子孫ノ繁昌ヲ祈請セン為」春日神社に奉納したが、その功徳で子息宣房が父祖代々絶えて久しい従一位に昇ったという（巻十三「藤房卿遁世事」）。同じく巻三十六には仁木義長が三世前義長法師と称した時、五部大乗経を書いて大神宮に納経した善根で伊勢国を管領したが、ある時神が童子の口を借りて、「無上菩提ノ心ニ趣テ此経ヲ書タラマシカハ、速ニ離二生死一、至二仏果菩提一ナマシ、只名聞利益ノ為ニ修セシ処ノ善根ナレハ」結局は悪行が心に染みて乱を好み、人を殺す事になるであろうと訓戒されという（「義長五部大乗経事」）。

『今鏡』にも五部大乗経を全部書写するのは容易ではないと述べられているが（第五の「水茎」）、比較的短期間に不便な配所で書き上げられたのは、新院が余程の決意を持って居られた事を示している。新院は「あと（手跡――写経）は都へかよへども」の御歌にもあるように、たとえ御自身帰京は叶わないまでも、自筆の経文納経が拒否されるとは全く予想されなかったようである。都へ還れる手跡が羨しいとまで詠まれたのに、それさえも拒まれたのであるから、その落胆とその結果の怨りは激しいものであったに違いない。納経拒否に信西の意向が反映していることは諸本ほぼ一致しているが、活字本、鎌倉本には信西云々は無く、あるいは主上の許可が無かったと述べ（活字本）、あるいは納経の記事が無く、写経は怨みに報いる為であったと述べられている（鎌倉本）。五部大乗経一九〇巻の書写が、信西が死ぬ平治元年までの三年間に完成されたか否か疑問の余地がある。一方院に対する同情の為信西が不当に悪役とされた憾みもある。しかし『吉記』によると、後に崇徳院社を造営する際、民部卿成範が上卿となっていたのを、崇徳院の讎敵というので皇后宮大夫兼雅に替えられた記録がある（寿永三・四・九）。このような事実を考えると、信西が納経阻止に動いた事も無下に否定できないようである。

二

金刀本によると、新院は後世菩提の為書写した五部大乗経の納経まで拒否されるに至って、ここまで自分を追い詰めた相手に対し後世までの敵として報復しようと決意され、髪も剃らず、爪も切らずに天狗さながらの御姿になられた―朝廷はこの事を聞いて平左衛門尉康頼を実情視察に遣したところ、新院は風聞に違わぬ物凄い形相で、自分の願いがすべて空しくなった以上「不慮の行業」を企てる外ないと告げられたという（康頼の事は鎌倉本とほぼ同趣意、半井本、『平家物語』には無い）。新院は経文の奥に、写経の功力で我が罪を救おうとしたが、それも妨げられた以上「（写経の）莫大の行業を併三悪道に抛籠、其力を以、日本国の大魔縁となり、皇を取て民となし、民を皇となさん」[注⑧]と舌の血を以て誓状を書かれ、それを海底に入れられたという（後半の「皇を取て民となし」以後は他本には無い）。海底投入は半井本、盛衰記・長門本には無いが『白峰寺縁起』に至って始めて、椎途（つちのと）の海と具体的な場合を示している。椎途はまた槌門（『讃州府史』『摩尼珠院寺譜』）、槌途（『綾北問尋鈔』）、槌戸（『讃岐国名勝図会』）、大槌・小槌（『直島旧跡順覧図会』）、経島（『全讃史』）と書かれている。又『白峰寺縁起』では、経の箱に竜宮城に納給へと書いて椎途の海に浮べさせられたところ、海上に火が燃え、童子が舞をまって経を納めたので、院は我が願が成就したと仰せられたという（『綾北問尋鈔』『讃岐国名勝図会』『金毘羅参詣名所図会』[注⑨]はこの竜宮伝承を引いている）。

『吉記』には「崇徳院於二讃岐一、御自筆以レ血令レ書二五部大乗経一給。件経奥、非理世後生料、可レ滅二亡天下一之趣、被二注置一件経伝在二元性法印許一」（寿永二・七・二六）と記されて居て、ほぼ軍記物語の内容に副う記述がある。ただし元性法印の許に在ったとすれば、海底投入は無かったことになる。元性法印は仁和寺華蔵院に居られたので、そこにこの五部大乗経は保管されていたようである。新院の御希望のように鳥羽や八幡に納入されなかったのは、恐らく鳥羽は父院鳥羽法皇への遠慮があり、八幡は清和源氏の信仰が深い神で当時の朝廷、院、平家関係者により忌避されたのであろう。

讃岐院の崩御について『今鏡』は、「あさましきひなのあたりに、九年ばかりおはしまして、うきよのあまりにや、

御やまひもとしにそゑておもらせ給ければ、みやこへかへらせ給こともなくて、秋八月二十六日に、かのくにゝてうせさせ給にけりとなむ。しろみねのひじりといひて、かのくにゝながされたるあざりとて、むかしありけるが、この院にむまれさせ給へるとぞ、人のゆめにみたりける。そのはかのかたはらに、よきかたあたりたりければとてぞおはしますなる」と詳細に述べ、更に讃岐の御生活に対して「いかばかりの御こゝちせさせ給けむ」と同情申しあげている（第二の「やゑのしほぢ」）。しかし当時の記録としては『百錬抄』に「讃岐院崩二于配所一。四十六太上皇〈後白河院〉無二服仮之儀一」（長寛二・八・二六）とあり、外に『歴代編年集成』に簡単な記載がある程度で、朝廷でもほとんど無関心であった。

『今鏡』に言う「白峰の聖」には類話がある。『南海通記』[注⑩]巻一には里人の説として、讃岐院の前生は廻国の聖の僧で、日本国六十六ヵ国に六十六部の法華経を納めた功徳で、十善の君の生を享けられたが、前生で讃岐松山田井千町の領主となりたいとふと思われた一念で、現世では讃岐へ遷幸されるようになったという。『白峰寺縁起』には、西行が「八幡に七日参籠して、崇徳院の霊威、大菩薩の冥慮、一体にておはしますやらんと祈念するに、夢想に、若宮の御殿より御戸を排て、女房出て、我崇徳院の本地よと示し給ふ。此官〈宮か〉の御本地十一面なれば、それよりぞかやうに申付たる」と述べられている。又『讃岐国名勝図会』には、昔白峰に静円法師という沙門があり、木沢の深谷に毎夜通って法華経を読誦したという。これらの話を綜合すると『今鏡』の「白峰の聖」の像が形作られそうである。

院崩御の地について『保元物語』半井本は讃岐国府とし、活字本、『平家物語』諸本は志戸、志度道場、志度等としているが、現大川郡志度町には外に史跡も伝承もなく、諸注ならびに地誌考証でも概ね否定的である。『讃岐府志』『綾北問尋鈔』を始め、図会、地誌類は鼓岡としている。新院の最後の御所は諸物語にも鼓岡と記されて居り、崩御地を同地とすることは極めて自然であろう。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com